

タイトル	いま何故モデル・フォレストか？
氏名 (所属)	河村能夫(龍谷大学経済学部)
ホームページ	<a href="http://kawamuraoffice.web.fc2.com/topipframe.html">http://kawamuraoffice.web.fc2.com/topipframe.html</a>
キーワード	モデル・フォレスト、里山、流域社会、森林、自然資源、地域資源、過疎高齢化社会
アピール文	モデル・フォレストは、過疎高齢化で森の維持管理が難しくなっている川上のコミュニティと、その恩恵を何の疑問もなく受けてきた川下の都市住民とが、連携しながら新たな資源管理のシステムを構築する試みです。
要旨	<p>日本の国土は 75%が森林であり、国有林などの官有林以外は民有林です。それらは山に住む人々によって維持管理され、そのお蔭で豊かで安全な水資源が確保されてきました。しかし川下の都市に住む人々は、そのことに何の疑問も持たずにその恩恵を享受してきました。</p> <p>民有林のうち、木材用として植林し管理されてきた森林は、経済のグローバル化によって安価な外材が輸入されるため、伐採して木材として商品化することが経済的に成り立たなくなり、山に手を入れなくなり山が荒れる結果になっています。人々の生活圏にある森林である里山は、生活様式の変化に伴ってその維持管理の必要性が薄れ、さらに過疎高齢化によって里山を維持管理してきたコミュニティそのものが疲弊してきています。いままで私的経済の範疇で行ってきた森林の維持管理が難しくなっているのです。</p> <p>このことは、豊かで安全な水資源の確保といった自然資源の維持管理に問題が生じてきていることを意味します。これは直接的に森林に関わってきた山の人々だけの問題ではなく、下流に展開する農村・都市部に住む人々の問題でもあります。皮肉なことに、こうした状態に至って初めて、いままで私的経済の範疇で維持管理されてきた森林の持つ本来の公共的機能が表面化したと言えます。森林は、単なる私的資源ではなく、公共的な資源であり、地域資源であるのです。したがって、この問題は、森林に直接的に関わってきた人々だけの問題ではなく、森林を水源とする川の下流に住む人々の問題でもあります。このような、水源の在り方から川の全流域の社会の関わり方までを包括して理解した社会を流域社会と言います。ここでは、森林は、単なる私的資源ではなく、流域社会にとっての地域資源なのです。</p> <p>ところが、森林管理維持のノウハウは、川上の人々のコミュニティに蓄積されています。一方で、川下のコミュニティには経済的余力とマンパワーがあります。したがって、川下の人々と川上の人々の連携によって新たな資源管理のシステムを構築することが可能となります。現在、そのシステムの構築が火急の課題となってきましたが、それを解決する試みがモデル・フォレスト運動です。これは京都府が全国に先駆けて始めた森林管理システムの構築政策で、この数年間で約 30 か所のモデル・フォレストが生まれてきています。</p>